聖　書：マルコの福音書 12：13〜17
説教題：神のものは神に
日　時：2026 年 3 月 8 日（朝拝）

エルサレムにおけるイエス様の最後の一週間の記事を読んでいます。前回に続き、今日の箇所でもイエス様の敵対者たちが論争を仕掛けて来ます。13 節の「彼ら」とは誰のことでしょうか。それは前の 12 節に出て来た、イエス様を捕らえようとした人たちです。さらに遡ると、この彼らは 11 章 27 節に出て来た祭司長、律法学者、長老たち、すなわちユダヤの最高法院サンヘドリンのメンバーであったことが分かります。彼らは前日のいわゆる「宮きよめ」の出来事を受けて、「あなたは何の権威によって、これらのことをしているのか」とイエス様を詰問しました。その問いをイエス様が見事に退けられたことを前回見ました。その彼らが再び論争を仕掛けます。「彼らはイエスのことばじりをとらえようとして、パリサイ人とヘロデ党の者を数人、イエスのところに遣わした」とあります。ここで遣わされた人々の組み合わせは実に異様です。というのも、この人々は普段協力する関係ではなく、むしろ犬猿の仲にある者たちだったからです。パリサイ人はイスラエルの律法に熱心で、当時のローマの支配を快く思っていませんでした。ユダヤ人の国が独立し、神の民として高く上げられることを願う人々です。一方のヘロデ党はローマの下でこの地を治めているヘロデ家を支持する人々です。つまり、ローマの支配を肯定する親ローマ派でした。この相反する者たちが一緒に遣わされたのは、この後の質問と関係します。イエス様がどのように答えても、どちらかがイエス様を訴えることができるようにするためでした。

その問いが 14 節にあります。まず彼らはイエス様にお世辞を言います。「先生。私たちは、あなたが真実な方で、だれにも遠慮しない方だと知っております。人の顔色を見ず、真理に基づいて神の道を教えておられるからです。」　これは内容としては正しい言葉です。彼らが本当にこの言葉を尊敬をもって語ったのなら、この後の質問はしなかったでしょう。ですからこれは悪意から出た言葉でした。この後の問いにイエス様が逃げずにはっきり答えるように仕向けるための前置きだったのです。そして彼らは問います。「ところで、カエサルに税金を納めることは、律法にかなっているでしょうか、いないでしょうか。納めるべきでしょうか、納めるべきでないでしょうか。」これは非常に答えにくい質問でした。どのように答えても大きなリスクが伴います。もしカエサルへの納税を肯定すればどうなるでしょう。イエス様はユダヤ人から裏切

り者と見られるでしょう。ユダヤ人はローマに納税することを苦々しく思っていました。異邦人に税金を取られるのは屈辱の象徴でした。そんな中、イエス様がローマに従うようなことを言えば、「イエスはユダヤの国を回復するメシアではなかったのか」と言われ、民衆の支持を一気に失うことになるでしょう。では反対に納税すべきでないと言えばどうなるでしょう。今度はローマへの反逆者と見られます。政治的な危険人物として公権力によって逮捕されるかもしれません。このようにどちらに答えても半分の人々の支持を失うことになります。彼らは先ほどの前置きを使って「逃げずに答えよ。Yes or No で答えよ」と迫ります。イエス様は逃げ場のない状況に追い込まれたかのように見えました。

これに対してイエス様はどうされたでしょうか。15 節にこうあります。「イエスは彼らの欺瞞を見抜いて言われた。『なぜわたしを試すのですか。デナリ銀貨を持って来て見せなさい。』」　質問した者たちは、イエスは何をするつもりなのかと不思議に思ったかもしれません。しかし言われるままにデナリ銀貨を差し出します。するとイエス様は尋ねられました。「これは、だれの肖像と銘ですか。」　彼らは答えます。「カエサルのです。」　このやり取りを経てイエス様は 17 節の言葉を語られます。そのイエス様の言葉を三つのポイントで見て行きたいと思います。

まず第一にイエス様は「カエサルのものはカエサルに返しなさい」と言われました。税金を納めなくても良いとは言わなかった。むしろ納税すべきであると言われました。なぜそうなのでしょう。ここで先ほどのデナリ銀貨のやり取りが効いて来ます。イエス様が彼らに持って来させたデナリ銀貨にはカエサルの肖像と銘が刻まれていました。ユダヤ人はこの貨幣を使うことを快く思っていなかったかもしれませんが、実際に彼らはこの銀貨を用いて物を売り買いし、日常生活を営んでいました。そうした経済生活ができるのはカエサルを頂点とするローマの支配が確立していたからです。彼らはその支配のもとで生活し、現実にその恩恵にあずかっていました。誰の世話にもならず一人で生きているのなら別ですが、彼らはこの銀貨と、それによって保たれている社会の中で支えられて生きています。その恩恵を受けていながら自分の側の義務を果たさないというのはおかしなことです。支えられている者として、返すべきものを返すこと、負うているものを返すことは当然の務めである。イエス様はそう言われたのです。

これは単に人間的にローマのお世話になっているからというだけのことではありません。このような政治的統治は、神学的に言えば神の一般恩恵によるものであり、その背後には神がおられます。カエサルをはじめ為政者たちを立てておられるのは他ならぬ神ご自身であり、神がご自身の器として彼らを用いておられるのです。ローマ人への手紙 13 章 1 節：「人はみな、上に立つ権威に従うべきです。神によらない権威はなく、存在している権威はすべて、神によって立てられているからです。」　ここに存在しているすべての権威の背後には神がおられると言われています。「その人がキリスト者である場合は」という限定はありません。キリスト者であろうとなかろうと、その人は神によって立てられているのであり、そこに神の御心があります。もちろん個人個人の目から見れば、為政者について様々な思いを抱くことはあると思います。しかし為政者がどんな人であっても無政府状態、つまりアナーキーよりははるかに良いのです。神はその支配者を通して、ローマ書 13 章の続きにあるように悪を抑制し、社会的善を促進しようとしておられます。人間の悪が暴走し、この世が地獄のようにならないように、なお秩序と平和が保たれるように導いておられます。ペテロの手紙第一 2 章 13～14 節：「人が立てたすべての制度に、主のゆえに従いなさい。それが主権者である王であっても、あるいは、悪を行う者を罰して善を行う者をほめるために、王から遣わされた総督であっても、従いなさい。」　テモテへの手紙第一 2 章 1～2 節：「王たちと高い地位にあるすべての人のために願い、祈り、とりなし、感謝をささげなさい。それは、私たちがいつも敬虔で品位を保ち、平安で落ち着いた生活を送るためです。」　すから私たちは税を納めるのはもちろんのこと、立てられた権威の背後には神がおられることを見つめて、その神への信仰と服従の現れとして、目の前の統治者を敬い、その祝福のために祈り、その権威に従うようにと命じられています。

イエス様は続けて言われました。「神のものは神に返しなさい。」　この言葉の前には日本語では訳されていないギリシャ語があります。それは「カイ」という言葉で、英語の And、日本語なら「そして」になるでしょうか。日本語ではあえて訳さなくても良い言葉ですが、ここでは重要な意味を持つと思われます。これを二つ目の点として見たいと思います。もしイエス様がこう言われたどうでしょうか。「カエサルのものはカエサルに返しなさい。しかし神のものは神に返しなさい。」　このように「しかし」で結ばれていたなら、「カエサルのもの」と「神のもの」は互いに対立するもののように聞こえます。さらには後の言葉によって、前の「カエサルのものはカエサルに」という言葉がほとんど打ち消されたかのようにも響くでしょう。しかしイエス様はそ

うは言われませんでした。イエス様は「カエサルのものはカエサルに」と「神のものは神に」という二つの言葉を「そして」で結ばれました。ここに示されているのはこの両方が否定されていないということです。両方が肯定されています。質問者は「カエサルを取るのか、神を取るのが、どちらかを選べ」と迫りました。しかしイエス様の答えは「両方は両立する」というものでした。

ではこの両者の関係はどのような関係なのでしょうか。言うまでもなく、人間への服従と神への服従が同列なのではありません。「カエサルのもの」と「神のもの」は同じ平面にあるものではありません。カエサルに与えられているのは地上の統治です。しかもそれは外的な統治、地上の社会の秩序を保つことです。従ってそれは私たちの魂の内部にまでは踏み込めません。私たちの魂の救いには関係しません。そういう意味で限定的です。それに対して「神のもの」はすべてに及びます。詩篇 24 篇 1 節：「地とそこに満ちているもの、世界とその中に住んでいるもの、それは主のもの。」ローマ人への手紙 11 章 36 節：「すべてのものが神から発し、神によって成り、神に至る」。ですから「神のもの」は「カエサルのもの」より、比較にならないほど大きいことは明らかです。従って「カエサルのものはカエサルに返す」という生き方は、「神のものは神に返す」という、より大きな枠の中に位置づけられることになります。「神のものは神に返す」という、より根本的なの中で、それと調和するように考えられるべきであるということになります。

ですから、もしこの二つが衝突する事態が起こるなら、私たちは使徒の働きでペテロやヨハネが語ったように、「人に従うより、神に従うべきです」と言わなければなりません。私たちは立てられた権威に従うように命じられていますが、その権威は無制限ではありません。神に背くことまでして為政者に従うようにとは決して命じられていません。「神のものは神に返す」が、私たちにとっての根本原理、第一原理です。しかし同時に、イエス様がここで語られたニュアンスを崩してはならないと思います。イエス様はここで、為政者への不服従を勧めたり、その権威を軽く見るようには教えてはおられません。多くの人々が、カエサルに対してもっと否定的なことを言ってくれるだろうと思っている中、カエサルに税を納め、従うことは神に従う生活の中に十分な位置付けを持つと語られました。これが基本スタンスです。キリスト教は昔も今も本質的に反政府的ではありません。統治者に従い、良き市民として歩むことは、神に信頼して生きる私たちの信仰生活の一部なのです。

三つ目に見るのは「神のものは神に返しなさい」という言葉です。これまで為政者への服従も神への服従の一部であることを見て来ました。しかし神への服従はそれだけではありません。為政者に関することは、その中のごく一部です。ですから「神のものは神に」という言葉は、もっと広い内容を私たちに考えさせます。では「神のもの」とは何でしょうか。先ほどそれは「すべて」に及ぶと言いました。しかしここではもう少し焦点を絞って考えることもできるでしょう。イエス様は先にデナリ銀貨に刻まれたカエサルの肖像を指して、その銀貨を「カエサルのもの」と言われました。この「肖像」という言葉はギリシャ語ではエイコーンであり、英語では Image、日本語では「かたち」と訳される言葉です。では神のかたちが刻まれているものは何でしょうか。もちろんすべてのものには作者なる神が刻印されているとはいえ、聖書が特別な意味で「神のかたち」であると呼んでいるのは私たち人間です。ですから私たちはまさに神の肖像が刻まれている「神のもの」であり、神にお返しすべきものです。これは創造の観点からだけではなく、贖いの観点からもそうです。私たち人間は創造当初の良い状態から堕落しました。しかし神はキリストを遣わし、その十字架によって私たちを救ってくださいました。コリント人への手紙第一 6 章 19〜20 節 :「あなたがたのからだは、あなたがたのうちにおられる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたはもはや自分自身のものではありません。あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから、自分のからだをもって神の栄光を現しなさい。」　ここに私たちはもはや自分自身のものではなく、神のものであると言われています。もともと神のものであった私たちですが、キリストの贖いにあずかって益々自らを「神のもの」として神にお返しする生き方へと召されています。私たちは自分の心と体をそのように神にお返ししているでしょうか。心をささげることの具体的な現れとして、からだの用い方にもそれは現れているでしょうか。私たちの目、耳、口、手、足を神に喜ばれるように神にお返ししているでしょうか。与えられている賜物や才能はどうでしょうか。さらに私たちに委ねられている持ち物や富、また時間や機会はどうでしょうか。カエサルの肖像が刻まれた銀貨をカエサルに返すようにと主が言われた通り、神が刻印されている私たちも神にお返しすべきものです。納税と同じように、これも義務に相当することです。私たちが選べるオプションではありません。もちろん私たちは喜びと感謝をもってそうします。しかしそれでもこれは義務に属することです。私たちは「神のもの」です。ですから「神のもの」を神にお返しして生きるのです。そしてそのように生きるところに私たちの人間性の真の回復があるのであり、また真の喜び

があるのです。

最後の 17 節後半に「彼らはイエスのことばに驚嘆した」とあります。敵対する者たちでさえ、「まさかこんな答えがあるとは！」と圧倒されたのです。イエス様の知恵に驚かされたのです。イザヤ書 11 章 2 節にメシアの上には主の霊がとどまり、それは知恵と悟りの霊であると預言されていました。イエス様はまさにそのようなお方です。そしてここにも 11 章 28 節の「何の権威によって？」という祭司長たちの最初の問いに対する答えがあります。この方は神の子メシア、キリストなるお方なのです。

私たちもこの御言葉に接して驚嘆したいと思います。非常に複雑で難しい問いに対してイエス様はたった一つの簡潔な言葉で答えられました。しかしその言葉はとてつもない含蓄を持ち、以後の歴史に大きな影響を与え、キリスト教の歩みの指針となって来ました。私たちも驚嘆しつつ、ここに語られたメッセージを良く受け止めたいと思います。カエサルのものはカエサルに返すべきです。為政者への服従はキリスト教信仰に反しません。政治的統治もまた神の恵みです。ですから私たちは御言葉に反する歩みを強いられない限り、為政者に従い、為政者のために祈りたいと思います。その歩みを通して主に信頼する信仰の道を進み、良き証しを立てる者でありたいと思います。そして同時にもっと大きな根本的な義務があることを覚えたいと思います。それは「神のものを神に返す」ということです。私たち自身が神に返すべき「神のもの」です。私たちの内に神から離れて自分のものと言えるものは一つもありません。私たちはすべてをもって自分自身を神にお返しする歩みへ進みたいと思います。そこにこそ神のかたちに造られた私たちの本来の姿があり、真の救いと喜びがあります。イエス様は今日の言葉によって、この歩みへと私たち一人一人を招いておられるのです。